

ほなゐ歴史通信

第120号

2026(令和8).9.1

金町の観音堂と益子家

金町から県道大子那須線を北上すると、池田橋の少し手前の山側に観音堂がある。益子志摩守が病門の場所（病氣にかかりやすいとされる家相の方角）に建立したとされ、境内には益子家代々の墓地がある（石井良一『奥久慈膝くりげ』）。益子家は、下野益子庄高館の城主の後裔が大子の地に移り住み、寛永十年（一六三三）、益子和泉兼継の代に、水戸藩では初めて郷士に取り立てられた旧家として知られている（瀬谷義彦『水戸藩郷士の研究』）。今回は、観音堂と益子家に関して、新たな資料と当家に伝わる逸話を紹介する。

まず、茨城県立歴史館に所蔵されている「益子氏系図（大子村益子氏）」（高橋清賀子家文書。以下、「系図」）である。高橋家文書は、水戸藩の学者、豊田天功（一八〇五～一八六四）、小太郎（一八三四～一八六六）父子の子孫に伝わったもので、天功と小太郎は、歴史編纂事業を行っていた彰考館の総裁を勤めている。

系図には、始祖の「紀貫之男始常州給信田郡、次宦、紀仲之、安和二歳行四十八才卒」から「益子逸平兼辟」までが記載されている。益子家が歴代の水戸藩主に「御奉公」した事蹟が記載されており、作成者は益子家の関係者と考えられる。また、資料の一枚目には「豊田之図書印」が押印されていることから、天功又は小太郎が彰考館に勤めていたときに収集されたものであろう。

系図の最後に見える逸平兼辟（後に民部左衛門を襲名）は、明治元年（一八六八）、天狗党の追討を受け、八日市場の戦いで亡くなっている。系図では、逸平兼辟が民部左衛門を名乗っていないことから、作成の時期は家督を相続する以前と考えられる。

系図によると、志摩守の嫡子の和泉守兼継は初代藩主頼房から百石の士分として取り立てられ、藩直営の小久慈金山の元締めを勤めた。家来一七〇人を抱え、土手や堀構えを持つ屋敷を持ち、藩主を迎える御殿があった。兼継の息子の郷左衛門は二代藩主光圀から郷士に召し出され、五十石と民部左衛門の名を拝領し、光圀が西山荘に隠居後、息子の卯兵衛と御前に度々勤めたという。

観音堂の建立の経緯については、次のように記載されている。和泉守兼継が藩主頼房の平癒宿願のため、西国三十三所と大社参りをし、尾張藩主、紀伊藩主にも御目通りを得た。帰国の後、観音堂を建立し、お札を納めたが、藩に無断で出かけたため、お叱りを受けて謹慎したという。なお、観音堂は屋敷に建立されたこともあり、後に現在の場所に移築されたのかもしれない。

また、現当主の薫氏が祖母から聞いていた話によると、観音堂



には小仏二体（写真）が安置されていたが、いつの頃から自宅で保管されるようになった。薫氏の父、故寛寿氏が出征する際、祖母は小仏を襟に縫い付けて持たせたという。この小仏は、薫氏によって今も大切に保管されている。

現在、益子家に残る資料について、薫氏のご協力を得て、大金祐介氏（歴史資料調査研究員）、石井裕氏（学習院大学史料館客員研究員）と調査を進めている。調査の成果については、今後、本誌上でも紹介していきたい。（小松崎研）

大子町の坂には名前があるのか

中島儀昌

◇坂の名前

様々な地域自治体にある坂には名前があり、観光のパンフレットの地図にも坂の名前が記載されています。坂の名前からはその地域の歴史や昔の文化や交通手段なども想像出来て面白いものです。それでは、視点を変えて、坂の名前が大子町にあるかという、私自身はそれを聞いたことがなく、疑問に思ったので数年前から少しずつ坂に名前があるのか調べてみました。

◇地図等で読み、歩き、聞いて調べる

まず町の地図などで名前を調べてみますと、峠の名前や道には名前がありました。坂の名前については記載が見当たりませんでした。町には視界に入るほど坂が多く、これだけあれば必ず名前がある気がしたので、次に近隣の坂を歩いてその痕跡を探してみました。おそらく岩のある坂であるためでしょう。この碑があったことで大子町の坂にも名前があるという事が分かりました。しかし他のいくつかの坂には碑もなく、無名の坂がただそこにあるという状態でした。

その次に、ほかの方々へ坂の名前をたずねることにしました。すると幾人の方から坂の名前を教えていただけました。どうやら町の各地の坂にも名前があるようです。その後、教えていただいた坂へ行き、現地で確認をした坂の名前をいくつか左へ記します。

- ・塙 「イド坂」 城の井戸があったらしい。
- ・上金沢 「大門坂」 大きな門があった？
- ・頃藤 「御堂坂」 御堂があった？
- ・大子 「三貫坂」 産が難の坂、三つ目小僧のいた坂で三眼坂？
- ・小生瀬 「這坂」 這うほど困難な坂？

◇危惧すること

さてこのように坂の名前を知れて良かった反面、危惧も感じました。これらの坂の名前はどうかや記録や標示がされておらず、多くの名前が口承で伝えられているという事です。前述の通り坂の名前から歴史や文化や生活の様子等のことを知れますが、一旦その名前が分からなくなってしまうえば、歴史なども途切れてしまわずです。口承だけではなくしっかりとした記録が必要でしょう。歴史や文化は未来へのリレーとも言われています。途切れずに二十二世紀、その先へと繋がっていつてもらいたいものです。

◇知りえた坂の名前から

身近な疑問から始めた私の坂の名前の調査はここまでとします。坂の名前を教えていただけました方々には感謝申し上げます。

さて町にも坂の名前があることが分かり、その数が増えてきた中で思うこともありました。他の地域自治体のように坂の名前の標示があれば、町へ観光やサイクリングやトレランやハイキング等で訪れた方々にも地域の歴史や魅力を知っていただけということ。例えば、ドライブ中に坂の名前を見て、そこから楽しい話題も生まれるかもしれませんし、サイクリング中やランニング中に激坂に出会った時にも坂の名前が越えるべき相手のような存在となつて気分高揚にもなるかもしれません。また、大子町へ帰省された方々には名前のある坂が故郷の風景として印象深く心に残るかもしれません。

その他、名前の分からない坂には新たに名前をつけても良いかもしれません。地域の人で親しみを込めて名前をつけて、令和時代の名前の坂があっても良いかもしれません。今後それも歴史となるはず。坂の名前にご興味のある方は、例えば個人や各地区で坂の名前や由来を記録するのも良いかと思えます。

※問い合わせは生涯学習担当へ御連絡ください。（大子町在住）

大子町の中世石造物（一）

野内智一郎

大子町には、様々な時代の石造物が遺されている。それらは、現在も路傍や神社の片隅でひっそりと、しかし確かに、大子町の歴史を今に伝えている。大子町では、道標の調査が記憶に新しいが、今回、中世の石造物にスポットを当てて紹介したい。

第一回は板碑（いたび）である。これは、中世に造られた板状の石の卒塔婆である。供養目的に造られ、中世には「板石塔婆」（いたしとうば）と呼ばれた。全国でみられ、関東では特に十三世紀から十六世紀に確認される。埼玉県秩父産の緑泥片岩製の武蔵型板碑と筑波南麓産の黒雲母片岩やホルンフェルスを用いた下総型板碑が知られる。中世武士の信仰に強く関連する重要な遺物である。

板碑は大子町で三基確認されている。いずれも異なる特徴を備えており、注目される。一つ目が、大子町大子の愛宕神社境内に、二つ目が大子町下野宮秋葉神社境内に、三つ目が大子町浅川に所在する。それぞれここでは大字名をとって大子板碑、下野宮板碑、浅川板碑とする。

①大子板碑

紀年銘はなく、中央にキリク（弥陀）一尊のみを配する。頂部山形を呈し、二条線をもつ。形は武蔵型板碑に似せているが、裏面は面取りがなく無調整である。石材は火成岩系を用いており、在地の製品と考えられる。型式にうまく当てはめることができない特殊な例である。

②下野宮板碑

平成六年の茨城県立歴史館による調査（佐藤次男・堤禎子・野内正美の三氏による）によって「元弘二年十月□日」と判読されている。

元弘二年は一三三二年に当たり、鎌倉幕府滅亡の前年で、倒幕を図る後醍醐天皇が隠岐に流されるなど、全国的に政情が不安定な時期である。

当板碑の石材は緑泥片岩で、埼玉県を中心に分布する武蔵型板碑である。埼玉県域にて製作され、持ち込まれたものである。梵字はキリク（弥陀）を中央に、左右にサ（観音）、サク（勢至）が配され、いわゆる阿弥陀三尊が表現されている。当板碑は茨城県内の武蔵型板碑の北限として知られているが、元弘二年ではなく三年と見る向きもあり、後世（中世以降）の搬入品の可能性も含めて今後精査が必要である。

③浅川板碑

線刻により地藏菩薩立像が表現された、特殊な板碑である。銘文は一部分のみが残るが、「貞治二年 八月」と刻まれている。貞治二年は一三六二年にあたる。「文光」との文字も見えるが詳細は不明である。百年ほど下る（康正元年・一四五五年）が常陸大宮市内でも線刻による不動明王像の板碑が発見されており、これらは画像板碑ともいうべき珍しい板碑になる。当板碑の石材は①の大子板碑と同様、火成岩系であり、大子町もしくはその周辺にて製作されたものと考えられる。

これら三基の板碑はいずれも異なる特徴を有しており、一口に板碑といってもその形態は様々である。これが当地方の中世の供養の形や有力者の在り方にどのような影響するのか、関心は深まるばかりである。

（常陸大宮市在住）



下野宮板碑

茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所の歴史

鈴木清貴

皆さんは天子町頃藤に農業関連の試験研究組織があることを知っていますか？その名を「茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所（以下、当所と表記）」と呼びます。国道一一八号線沿いにはあるのですが、国道から少々奥まった所にある総面積約五万九千平米の施設になります。入口付近には看板もありますので、名前を見たり聞いたりしたことはあるかもしれませんが、行ったこともないし、何をしているのか分からないが正直なところかと思われまます。そこで、これから地元天子を含む県北地域の農家と共に歩んできた当所の歴史と業務内容を紹介させていただきます。

まず、当所の歴史と言いますか沿革を紹介しますと、創立は昭和三十二年（一九五七）になります。当時は「茨城県山間地帯特産指導農場」と呼ばれており、場所は天子町北田気（写真上部）にありました。昭和三十四年（一九五九）には「茨城県山間地帯特産指導所」と名称が変わり、昭和五十五年（一九八〇）に天子町頃藤（写真下部）に移転しました。その後、平成四年（一九九二）に茨城県農業総合センターが発足したことを契機に、現在の名称となり現在に至ります。振り返ると、農場設立から数えて今年で六十九年目、頃藤に移転してからは三十七年目を迎えることになりました。

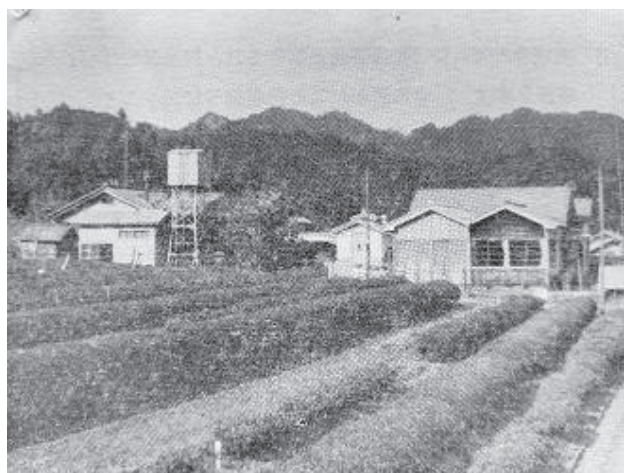
現在、職員数は十四名（時短勤務者含む）で、試験研究の従事者と現場作業の従事者に大きく分かれますが、試験の中核を担う職員は若手（三十歳代）で三名になります。

次に、当所の具体的な業務内容を紹介いたします。天子町の特産品には米や野菜、果物など多数ありますが、設立当初に当所（北田気）が取扱った品目は、リンゴ、桃、こんにゃく、茶、椎茸でした。品目ごとに栽培試験に取り組むだけでなく、品種等の展示や

農家への栽培指導も行っておりました。特に、品種や品種登録前の系統比較試験は、茶栽培の北限、リンゴ栽培の南限と呼ばれる天子町の試験データの位置づけが、地元農家だけでなく他県の試験研究者からも大変重宝されておりましたし、現在も続いております。

当所では試験テーマを設定する際、地元農家や生産部会だけでなく、関係機関（町やJA）など現地からの意見や要望を重要視しております。これまでも要望を受けて、欧州系ブドウやブルーベリー、山菜類（山うど、タラノメ）だけでなく、食用ほおずきや常陸大黒（花豆）、ハナモモ（枝物）など多様な課題に取り組んでまいりました。現在は、地球温暖化への対応も視野に、リンゴ、茶、ハナモモ、奥久慈ねぎ、常陸大黒をテーマとする課題に取り組んでおります。今後も試験研究だけでなく、指導機関として地元農家の皆様に頼られる組織を目指します。

（茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所長）



大子町に惹かれて

佐藤望夢

私は今年から、地域おこし協力隊として大子町上野宮でわさび栽培に取り組んでいます。大子町は、子どもの頃から袋田の滝などの観光地として親しみのある町でした。しかし、実際に住んでみると、それまで知らなかった魅力が数多くあることに気付きました。

農家になることを志してから、人生をかけて熱中できる作物を探していました。そんな中、大好きだった「わさび」に興味を持ち、大子町でわさび栽培をされている戸辺さんの存在を知りました。町のホームページで紹介されているのを見つけ、「まずは話を聞いてみよう」と思い、直接会いに行ったことが始まりです。初めてお会いした戸辺さんは、とても優しくそんな方で、この人から学んでみたいと思いました。

そして初めてわさび田を訪れた日のことは、今でも鮮明に覚えています。山あいを流れる澄んだ水、静かな空気、木々に囲まれた景色。その中で育つわさびは、それまで見てきた農業とはまったく違う世界でした。「こんな場所で育つ作物があるんだ」と感動し、その美しさと独特な栽培方法に心を奪われました。

わさび田の作業で一番好きなのは収穫です。約二年という長い時間をかけて育ったわさびを掘り上げる瞬間は、何度経験しても特別な喜びがあります。もちろん、順風満帆というわけではありません。天候に左右され、害虫や病気に悩まされることもあります。水路の管理や今後の販売について考えることも少なくありません。それでも、不思議と「辞めたい」と思ったことは一度もありませんでした。むしろ、毎日違う表情を見せてくれるわさび田と向き合う時間が楽しく、どうにかこの宝を守っていききたいと

考える日々を送っています。

一緒に活動している相棒は、常に「どうすればもっと良いわさびができるか」を考え続けています。その姿勢に刺激を受けながら、お互いに切磋琢磨できる環境は、とても恵まれていると感じています。また、地域の皆さんが作業を手伝ってくださったり、「ご飯でも食べていきな」と声をかけてくださったりと、多くの温かさに支えられてきました。大子町の人の優しさは、この町の大きな魅力の一つだと思います。

私が特に好きな季節は秋です。色鮮やかに染まる山々の景色は本当に美しく、わさびも旬を迎えます。静かな山の中で、清らかな水の音を聞きながら過ごす時間は、この場所だからこそ味わえる贅沢だと感じています。六月下旬には、近所の川で飛び交うホタルの幻想的な光景にも心を動かされました。改めて、水の綺麗さを痛感しました。

これからは、たくさんの方が訪れ、にぎわうわさび田をつくることが目標です。そして、大子町の今ある素晴らしい自然や文化を大切にしながら、新しい風も吹かせていきたいと思っています。わさびを通して、この地域に受け継がれてきた歴史を未来へつなぎ、「農業も捨てたものじゃない」と若い世代にも感じてもらえるような挑戦を続けていきたいです。

大子町に住み始めて、私は自然の豊かさだけでなく、人の温かさにも惚れ込みました。そして、「わさびが育つ場所が大子町で本当に良かった」と心から思っています。これから地を足をつけ、大子町の最北から茨城へ、そして全国へ、大子のわさびの魅力を発信できるよう努力してまいります。応援していただけたら幸いです。

(大子町農林課 地域おこし協力隊)



左から筆者、戸辺さん、石塚さん

【保内衆の戦国時代(7)】

佐竹氏の保内支配を支えた石井一族

戦国時代が始まり、常陸周辺でもたびたび戦闘が発生する中、永正七年(一五二〇)に佐竹義舜は白川氏所領であった依上保(保内、以下保内)に進出します。しかし、幼少である義篤が跡を継ぐと、佐竹家中はまとまりを欠き、保内支配も不安定化します。そのような中、大永三年(一五二三)に岩城氏が保内北東部に進出し、保内は佐竹氏と岩城氏が分有するような状況になりました。

佐竹氏の保内支配が揺らぎを見せる中、佐竹義篤は保内の「なませ一き」(生瀬一揆)に宛てて、次のような命令を出しています。

保内が取り乱れることについて、(そちらに)小祝加賀守を遣わしました。(あなたがたにも)辛勞をかけていると思います。が、すべて心を合わせて(こちらに)来るようにしなさい。タイミングについては、小祝に申付けました。

(「佐竹義篤判物写」、秋田藩家蔵文書二〇)

本資料の年代は書かれていませんが、佐竹義篤の用いている花押(サイン)の形から、保内が佐竹氏と岩城氏の分有状況にあった享禄五年(一五三三)から天文五年(一五三六)の頃のものと考えられます。保内が取り乱れる具体的な様相は不明ですが、天文三年から同五年にかけて佐竹氏と岩城氏との間で対立が生じていることから、両氏の対立に関わる戦闘が発生していることを示すと考えられます。保内における岩城氏方との戦闘が生じている中、義篤は重臣であり保内方面担当の小祝加賀守を通じて、「なませ一き」に対して参陣を要請しています。

ここに出てくる「なませ一き」は、生瀬地域の小生瀬周辺に基盤を置く石井一族のことを指しています。石井一族はもともと九州の豊後国出身でしたが、現矢祭町の石井周辺に土着し、その一

族の石井安藤太郎が生瀬に居住しています。「一揆」と聞くと、江戸時代の百姓一揆のような、領主に対して年貢の減免等を訴える集団行動をイメージしてしまいがちですが、中世の「一揆」という言葉は人と人とのつながりを指す言葉として使われていました。つまり、「なませ一き」とは、小生瀬の石井一族の同族集団を示すもので、石井一族のつながりが佐竹氏の保内統治や保内周辺での戦闘を支える形となっていたのです。

「なませ一き」の役割を見る上で、次の天文九年(一五四〇)のものと考えられる佐竹氏重臣の小祝兵衛三郎と和田掃部助が石井蔵人らに出した書状は重要です。

依上の事は、程なく落ち着くでしょう。あなたの親類まわりへ(味方に)引き入るようにと(敵方が)申してきたとしても、まず無益なこととなるでしょう。石井蔵人の兄弟の方々と談合し、そちらに留まるようにしなさい。(頃藤の)小川殿や高倉の方々と何事もよくよく談合するようにしなさい。

(「小祝兵衛三郎・和田掃部助連署書状写」部分、秋田藩家蔵文書一五)

こちらも書状に記された状況に不明な点が多いですが、佐竹氏と岩城氏との対立が佐竹氏方の勝利で落ち着き、保内全域が再び佐竹氏の支配に入る中、天文九年頃に保内をめぐる紛争が再燃したようです。その中で、「なませ一き」の構成員でもある石井蔵人が、兄弟や親類と談合しながら、保内方面の対応をまかされている様子が記されています。石井蔵人の親類に敵が工作を仕掛けてきても無駄と記しているように、「なませ一き」の連帯に対し、佐竹氏は強い信頼を置いていたようです。また、石井蔵人は頃藤城主小川氏や天下野街道沿いの高倉の武士たちとも連携をとっています。石井蔵人は一族だけではなく、生瀬周辺の領主とも良好な関係を築き、生瀬内外に渡ってネットワークを持っていました。このように広く人的関係を持つ石井一族が、佐竹氏の保内支配を支えることを期待されていたようです。

(藤井達也)

【史料紹介】

東京大学史料編纂所所蔵「久慈郡大子故城」

大子城は、大子町中心部南側の比高約二〇〇メートルの山上にある城郭です。近年、この大子城を描いた絵図が東京大学史料編纂所に収蔵されていることが確認されたので紹介します。絵図の名称は「久慈郡大子故城」（東京大学史料編纂所所蔵、内務省引継地図―内務省引継地図―〇二〇二一〇六）で、常陸国の十五の古城の絵図を明治時代頃に集めた「常陸十五城図」の一つです。

絵図の中心部には、十間程の区画を中心に東西に曲輪が広がる部分とその西側の二十間程の区画を中心とした曲輪から成る大子城の姿が描かれています。『新編常陸国誌』によると、前者は本城（城の中心となる曲輪）で、後者は外城（本城の外側に展開する曲輪）とされています。本城北東側を流れる押川沿いには、「鎧淵」と「兜淵」の名称が記されています。ここは、大子城主であった芳賀河内守が落城の際に身を投じた所と伝わっています（『新編常陸国誌』）。また、北側には、「往年佐竹勢落死ト云フ」と記される「飛沢」という地名があり、これまでほとんど知られていなかった佐竹氏の大子城攻撃にまつわる伝承をうかがい知ることが出来ます。本絵図で興味深いのは、城南部に「金穴 此地金質好シト云」、城東部に「金鑿穴数所アリ」「此辺金穴アリ」と金の採掘跡を示す記述が見られる点です。この辺りは、小久慈金山と呼ばれ、佐竹氏時代や江戸時代初頭の寛永十九年（一六四二）頃、慶安五年（一六五二）頃には金を採掘した記録が残ります。小久慈金山については現地調査がまだまだ進んでおらず、不明な点が多いですが、本絵図は小久慈金山の痕跡に関わる貴重な情報を提示してくれます。絵図から読み取れる情報は限られますが、本資料を利用して大子城の研究が進むことが期待されます。

（藤井達也）



【大子町内指定・登録文化財紹介（3）】

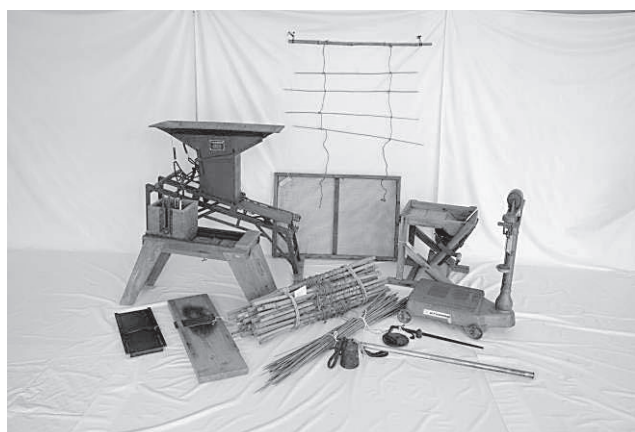
常陸大子のコンニャク栽培用具及び加工用具

区分・種類 国登録有形民俗文化財
登録年月日 平成二十六年二月二十四日
所在地 大子町大字川山九七九一
管理者 大子町

コンニャクカゴやドンゴ入れなどのコンニャク栽培用具八十五点及びコンニャクを薄切りにするカンナや干す際に用いるミゴ、串などの加工用具六十一点は、国登録有形民俗文化財に登録されており、これらの用具を通して、コンニャクの栽培から荒粉にするまでの工程を知ることができます。宮川コミュニティセンター内の「大子町昔の暮らし資料館」に展示しており、コミュニティセンター開館時（水曜日及び祝日を除く月曜日から金曜日の午前九時から午後五時）に無料で見学できますが、コミュニティセンター職員が外出等で不在の場合もありますので、見学希望の際は事前に御連絡をお願いします（七二一〇四五四）。

〈参考文献：大子町教育委員会編『大子町の文化財（改訂版）』（二〇一六）

（山崎仙一）



編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）

大金 祐介（大子町歴史資料調査研究員）

小松崎 研（大子町歴史資料調査研究員）

山崎 仙一（大子町教育委員会事務局）

村田 光（大子町教育委員会事務局）

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72）1148

発行日 二〇二六年（令和八）九月一日